

## 国内移民の声なき声

金子 正徳 (かねこ まさのり)

本館機関研究員



インドネシア国立政策  
移民博物館(開館準備中)／  
インドネシア

展示の予定については次のとおりである。まず、エントランス・ホールには、政策移民の生活について、開墾から現在の発展までを描いた大ジオラマを配置する。そして常設展示では、移民先での生活を物語るかつての農工具、狩猟道具、生活用具などを、国内移民が送り出されたインドネシア各地から収集し、解説付きで展示する。また、政策移民関連文書が閲覧可能なコーナーも設置する。一〇軒の建物では、それぞれの地域における移民の生活空間が再現される。しかし、専門職員や学芸員に相当する職員も未定で、展示品の収

インドネシア国立政策移民博物館、通称ムシウム・トランスミグラシは、インドネシア共和国ランブンプ州プサワラン県で、いま建設・開館準備が進められている。ここでいう政策移民とは、近現代のさまざまな時期に、現在のインドネシアにおいて政策的におこなわれた国内移民を基本的に指している。農家を主体とするこのような政策移民は、そのシステムや政策目的は違うが、明治期の北海道移民と比較対照が可能だろう。

一九〇五年に、オランダ植民地政府のもとで、ジャワ島中部から同博物館が建設されている地域へむけて最初の政策移民が送られた。以降、戦争や経済恐慌、そして政変など、さまざまな要因で中断を繰り返しながらも、小規模かつ断続的に、ジャワ島を中心とする人口密度が高い地域から低い他地域へと移民は送られた。現在にいたるまでの間に、もつとも集中的かつ大規模に移民政策が進められたのは、一九六五年以降一九九〇年代半ばであった。

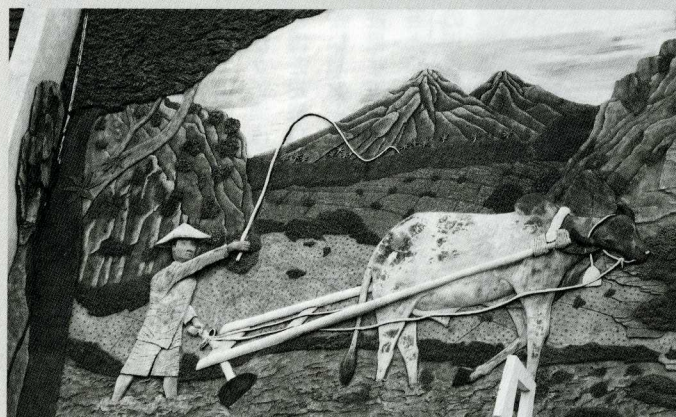
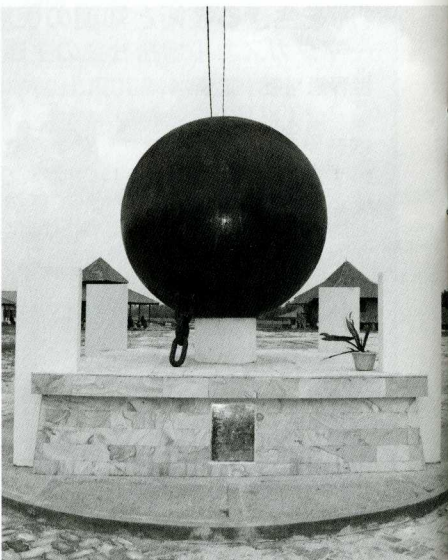
同博物館の設立目的は、この一〇〇年余の間、さまざまな時代および地域で、故郷とは大きく異なる社会環境・自然環境の厳しさを生き抜いた国内移民を記念し、その経験を伝えていくことである。

同博物館の建設は、政策移民一〇〇周年記念準備委員会において決定され、二〇〇五年末から展示施設の建設が始まった。敷地内には最終的に、常設展示館がひとつ、収蔵庫がひとつ、そして、常設展示館の背後にある広場のまわりには、政策移民の主たる送出地域と受入れ地域の家屋を模した建物が一〇軒配置される予定である。二〇〇七年に関係者を集めておこなわれたワークショップやシンポジウムで、展示内容に関する方向性が最終的に固められていった。

集もまだ始まっていないのが実情である。閉ざされた常設展示館のなかを警備員とともに覗いても、展示に使われる予定のラックなどが乱雑に置かれるのみである。二〇〇八年末に大統領を迎えておこなう開会記念式典は未確定のまま、二〇一〇年にずれ込むとも言われている。

完成し、動き出せば、インドネシアの国内移民の声なき声を記録しうる貴重な博物館となる。単なるハコモノで終わらず、早期に開館し、十分に機能することを祈るばかりである。

開拓のモニュメントとして設置されている鉄球。  
注水して重量を増したのち重機で引き、樹木をなぎ倒した



建設途中の本館正面。子どもたちの遊び場となっている

本館側面のレリーフ。  
政策移民の耕作風景が描かれている